

おしゃべり通信

No. 229 H30.12.15 発行 如春会 浦田医院

～H29年4月発行 日本小児科医会会報特集～



スマホパンデミック!⑥
＜スマホ社会の落とし穴＞



1. 現代文明の副作用? -④

3) 「人間=ヒト」になれない子供たち

「ヒト」が、一人の個体が生まれてくる時、どう発生してくるのか? まずは受精卵となった人間の遺伝子を持った細胞はお母さんの子宮内で胎盤を通じて栄養をもらい、細胞分裂を繰り返して人の姿になっていきます(個体発生)。面白いことにその経過は「系統発生」つまり人間=ヒトが生物種として成立してきた何億年の発生の過程をたどっているのです。でもヒトの場合、40週を経て体外に娩出され、生誕する時の赤ちゃんができることといえば、心臓が動いて・呼吸して・「私がここにいるよ」という信号の為に泣いて・排泄して・生きて育つ為に哺乳する吸啜反応くらいしかありません。自分で乳房を探しに行くこともできず、保護者とよばれる誰かの適切な補助・支援=「保育」がなければ「その後の発達は誘導されない」つまり「まだ発生は終了していない」のです。

では、いつになったら、どういう風になったら、「ヒト」としての完成形なのでしょうか?

ヒトがヒトらしくあることの特徴は、大脳皮質が急速に発達したことです。そのおかげで、膨大な記憶容量をもつ事となり、情報の記憶保持、言語の習得、情報の伝達、創意・工夫、器用さの獲得、道具の獲得等ができるようになりました。二足歩行になったことも、ヒトの視線を高くし、上肢を歩行以外に使えるようになったことに繋がり、それ以外の動物種が持てなかった生活スタイルの変化やものの考え方を促す促進剤になりました。また、前頭葉が発達したおかげで、「豊かな」感情を持つことができ、同情・共感・他人へ

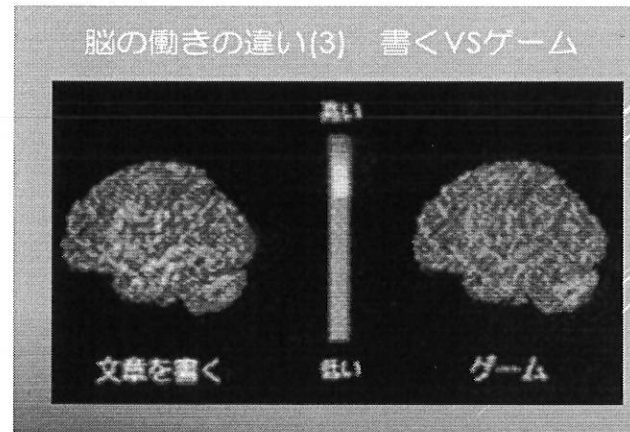
の配慮・我慢・集団への協力という能力も得て道徳という概念も作り、とうとう地球規模の大きな「世界」という社会集団を作ることができるようになったのです。

これらを成すために必要だったものは、生まれてから後に与えられる生育環境でした。この地球という生育環境であったからこそ、ヒトは現在の姿と能力に進化して来たのです。そして人として生き抜くための力を生育環境との相互作用で作上げてきたのです。

個体発生が系統発生を繰り返しているのなら、ヒトがヒトとして発育・発達している過程である乳幼児期に自然な生育環境との接触ではなく、電子メディアという、ヒトの歴史には全くなかった異質なものが混入したら、またそれとの接触に膨大な時間を充てているのだとしたら、「ヒトが生物種として発達してきた経過をたどっていない」ということにはかなりません。だとすればヒトはいつかどういよう進化の方向に進むのでしょうか?そしてそれに直面している現代人は、その意味合いが何であるのかをじっくり考えてみる必要がありそうだとはいませんか?

脳はどう働いているか?

赤色が強いところが一番働いている。



書く:
頭頂葉・側頭葉・後頭葉と脳全体の機能を使っている。

電子メディアゲーム:
後頭葉視覚野しか使っていない。
反射神経だけで動いており考えていない。

(以下次号)

(平成29年7月 S.URATA MD.)

感染症 up to date!

～突発性発疹～

ウイルスは変化する・・・?
病型が変化している?

「風疹」に代わって「三日はしか」のあだ名をもらった「突発性発疹」。日本においては戦後の輸入ウイルスで、ヒトヘルペスウイルスの感染です。長い間、乳児が初めて熱を出す病気で、自然治癒する春先の病気と考えられていました。

- ① 40度近い高熱が3日間(1～5日)。でも比較的元気。
- ② 解熱する(熱が下がる)頃には下痢を伴い、お腹周りから淡い粟粒疹が出現
- ③ だんだん顔や四肢に広がり、先にできた処から消失。
- ④ 発疹には2種類:原因であるヒトヘルペス6型・7型の差?
 - 1) 赤みが淡くて2～3日で消えるもの、
 - 2) もっと赤みが強く、時に癒合し、秕糖疹(治りかけに米ぬかのようにぱらぱらと剥けてくる)となって、1週間くらい色素沈着が残る。

(以下次号)

(H30年5月 S.URATA MD)

“子ども・若者とメディアを考える会”

期日:平成31年1月25日(金)19:00～

場所:玉名郡市医師会館3階大ホール

内容:「青少年のスマホ等の利用に関する現状と課題及び対策」について

講師:玉南中学校 坂本一博校長